

前 奏 黙想	祈 禱
招 詞 詩編 124:8	讃 美 歌 324 主イエスはすくいを
讃 美 歌 85 主のまことは	献 金
祈 禱	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
信仰告白 使徒信条 566	黙 禱
聖 書 ホセア書 2:18~19	主の祈り 564
ガラテヤの信徒への手紙 2:19~20	讃 詠 545 父のみかみに
讃 美 歌 453 きけや愛の言葉を	祝 禱
説 教 『福音の自由と創造』	後 奏

使徒パウロ〜兄弟一同から「ガラテヤ地方の諸教会へ(ガラテヤ1:2)」という手紙。ガラテヤとは小アジアの一地方で、現代ではトルコ領内になろうか。パウロが開拓設立した「家の諸教会」。この手紙は諸教会へのいわば回状で、挨拶の定式もそこそこに、いきなり信仰の主題(1:4)が見え隠れしている。

早々に「こんなにも早く〜ほかの福音に乗り換えようとしている〜あきれ果てている(1:6)」と厳しい叱責がある。諸教会に何が起っていたのか。たとえばコリントの教会で問題になった土着的な宗教観や慣習との混雑とは違い、「ほかの福音」に引っ張られていたようだ。少しくらい違っていても同じ「キリストの福音」ならいいじゃないか、とはならないらしい。ここは福音の「分水嶺」となるきわどい見極めポイントで、今日の教会も改めて自らを省みるべき「福音」の根本かもしれない。

それでは「ほかの福音」とはいったい何か。「ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎない(1:7)」。「ある人々」とは誰か。エルサレムの「ヤコブのもとから来たある人々(2:12)」。ヤコブとはイエスの実弟、エルサレム教会内でペトロを凌ぐ実力者だった(1:18~19)。不可思議な兄への反発からか、弟のヤコブは保守的になり、その取り巻きはいつそう反動的で、「割礼」の有無に神経質な者たちだった(2:12)。

「キリストの福音を覆そう(1:7)」とする「ほかの福音」は、「割礼しなければ救われない」というユダヤの伝統。「柱と目されるヤコブとケファとヨハネ」は割礼を条件にしなかった(2:9)。ところが「ユダヤ教イエス派」のエルサレム教会では、「律法を守ってこそその福音」が定着していた。だからアンティオキアで、異邦人とののびやかな会食を嬉しがっていたペトロでも、うしろめたくなった(2:12)。ペトロは全教会の代表者なのに、下っ端のパウロが「福音的ではない」と激しく非難した(2:14)。それほどに律法(禁欲・勤勉)の掟は根深い。しかしここは、福音が絶対に譲れないところだった。

ユダヤの律法に限るまい。ガラテヤ書は私たちにとても試金石になろう。教会内で信徒を縛りつけている暗黙の決まり事を、福音は拒絶する。救われる条件、神に愛される条件、恵みが増える条件など、まったく無い。無いものを福音に付加してはならない。カルヴァンは福音の純粋性を強調するあまり、救われる者は「生まれる前から決められている(1:15)」と言い、いらぬ勘違いを生じさせた。

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる(2:20a)」。まるで「神秘的合一」だ。キリストとの合一で、私たちの癖や偏りは消えていくのか。いやむしろパウロはいつそうパウロらしくなっていった。「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるもの(2:20b)」。そうなのだ、キリストは「わたしのために身を献げられた」。御許に引き寄せて画一的な敬虔者にするのではない。「合一」方向性はまったく逆。私のために、あなたのために「身を献げられた」のだ。「キリストと共に十字架につけられた(2:19)」私。ここで、この私として十字架のキリストを抱える。キリストを納めた器(Ⅱコリント4:7)を律法や教会の決まり事で変形させてはならない。福音は各々の器をつなげてキリストの体をつくる。

福音には条件がない 私たちに 条件に合う窮屈な服を着せることはない 一人ひとりにキリスト 僧服も悪くないが キリストにはアロハシャツも似合う そういえば冷えたビールも飲んでいたな
本日礼拝後に役員会、カレーの日です。皆さん遠慮なくお召し上がりください。8月は水曜日の教会カフェと甲府の聖研はお休みです。熱い中ですが聖研・祈祷会はあります、8/9(土)1:30~3:00。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HP は「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。